



Title	『聖なる花』における天上的なものと現世的なもののコントラストについて
Author(s)	堀内, 研二
Citation	大阪外国語大学学報. 1977, 39, p. 63-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80661
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『聖なる花』における天上的なるものと現世的なるものの コントラストについて

堀 内 研 二

EL CONTRASTE ENTRE LO CELESTIAL Y LO MUNDANO EN “FLOR DE SANTIDAD”

Kenji HORIUCHI

En este ensayo trataremos de una obra representativa de la primera etapa de Valle-Inclán: “Flor de Santidad”. En primer lugar, estudiaremos las actitudes de los personajes ante el mundo actual y los paisajes que juegan un papel principal en esta “historia milenaria” y aclararemos el contraste entre lo celestial y lo mundano que, creemos, la caracteriza. Al examinar la mentalidad de la heroína, Adegá, nos damos cuenta con poco esfuerzo de que sus ojos siempre miran hacia el Cielo, quizá a causa de su situación miserable, de modo que esta pobre pastora considera casi todas las cosas vulgares que la circundan como algo divino y celestial. Por el contrario, casi el resto de los personajes vive con los ojos fijos en la actualidad, o sea, con el sentimiento mundano: unos pasan su vida sólo pensando con avaricia en la riqueza temporal, otros luchan astutos o miserables con esta vida. He aquí un contraste evidente e intenso. En cuanto a los paisajes, advertimos que se dividen en dos grupos. Uno pastoril y claro y el otro severo y oscuro. Creemos que esto deriva de la presencia o la ausencia de la luz solar. La luz que se vierte del cielo representa en esta obra algo feliz, bienaventurado y celestial, mientras que su ausencia, la falta de la gracia de Dios, en lo cual notamos también el contraste entre lo celestial y lo mundano.

A continuación, examinaremos lo que significa este contraste y encontramos en él la ausencia de la lucha o la oposición viva. Los dos elementos del contraste se funden como apunta Melchor Fernández Almagro: “«historia milenaria» en la que se funden la ingenua poesía de las leyendas piadosas y el crudo realismo de las tradiciones populares”, debido a lo cual se da un sentido estático que tiene mucho que ver con la estética de Valle que él mismo manifiesta en “la Lámpara Maravillosa”: “Solo buscando la suprema inmovilidad de las cosas puede leerse en ellas el enigma bello de su eternidad.”

En este ensayo encontrarán no pocas citas de la obra de las que no me voy a disculpar. Y es que sólo he intentado, además de aclarar concretamente dicho contraste, presentar la maravillosa literatura valleinclanesca que todavía no se puede encontrar ni entender en Japón a pesar de tener un gran valor.

世紀末デカダンの影響の下に、Valle-Inclán は短編集『女性たち』Femeninas (1895) や『祝婚歌』Epitalamio (1897) 等の習作期の作品において、貴族趣味と唯美主義の色濃い作風をつくりあげたが、今世紀に入ってその作風は一段と洗練され、『愛の宮廷』Corte de Amor (1903) と『四季のソナタ』Sonatas (秋のソナタ, 02, 夏のソナタ, 03, 春のソナタ, 04, 冬のソナタ, 05) においてその頂点に達することになる。処女作以来 Valle を捉えてはなさなかった上流階級の恋愛遊戯の退廃的でエロチックな描写が、アメリカ大陸からやってきたモデルニスムという手法を得て、みごとに開花した結果であった。ちょうどこれら四部作の創作と相前後して、別の傾向の萌芽がはぐくまれる。『四季のソナタ』に代表される作品群が上流階級の男女の恋愛、とりわけ不義をその主要なテーマとし、生活臭の感じられない人工的世界を描き出していたのに対し、この官能的な恋愛の要素が姿を消し、大地にしっかりと足をつけた民衆の生き生きとした生活の描かれる作品が現われてくる。その大地とは Valle の生まれ故郷ガリシアであり、作品とは短編集『ほの暗き庭』Jardín Umbrío (1903) 及び本稿でとりあげる『聖なる花』Flor de Santidad (1904) である。この新しい傾向は、『ラ・セレスティーナ』と同じく戯曲体の小説とも言うべき作品で、没落していく老郷士とその息子たち、及び彼らを取り巻くガリシアの下層民の群を描いた『野蛮劇』Comedias Bárbaras (1907-08)、さらに王位継承の内乱にみられる挿話を扱った『カルリスタ戦争』三部作 la Guerra Carlista (1908-09) に受けつがれていくことになる。

以上、『聖なる花』の Valle の初期作品内での位置づけについて概説したが、ここで本稿の目的について述べておこう。筆者はこの物語の登場人物の現実世界への対応の仕方、及びこの作品の中で主要な役割を果たしている風景描写について考察する中で、作品の特徴をなしていると思われる天上的なるものと現世的なるもののコントラストを明らかにし、さらにそのもつ意味について考えてみたい。

『聖なる花』は1899年マドリードの「Revista Nueva」誌第6号に載った『アデガ』Adega と題する小品を、1904年、5章26節からなる中編小説に書き改め上梓した作品である。この作品を「次の世紀になり清算した場合、今世紀の中で傑作としてあげられる数少ない作品のひとつである」と⁽¹⁾ 激賞している R. Sender の言葉は多少割引いて考えなければならないにしても、この小説が20世紀のスペイン文学を代表する作家 Valle の代表作のひとつであることに異論はない。

※

ここで作品のあらすじを紹介しておこう。

(第1章)

ガリシアの山岳地帯のとある旅籠で羊飼いとして働いている少女アデガが、ある冬のたそがれ時、山で家畜の番をしながら糸を紡いでいると、そこに各地の霊場を巡礼し、行く先々で敬虔な物語をしているひとりの托鉢僧が現われる。彼はアデガと共に旅籠に行き、そこのおかみに宿を請うが拒絶される。そこで、アデガは自分の寝起きしている牛小屋に彼を泊めてやった。

ア デ ガは孤児で、両親はその地を襲ったある飢饉の年に病死した。その後、戸口や道端でもの乞いをしていたが、3年ほど前の12の時旅籠にひきとられた。主人たちは専横で残酷で、彼女を奴隷のように酷使していた。牛小屋の中で巡礼はア デ ガを玩ぼうとするが、彼の中に聖性を感じている彼女は抵抗を示さない。ア デ ガには時おり精神異常の徴候があらわれた。山に羊を連れていき夢に耽っていると、天上界が彼女のまえにその姿を現わすのだった。

(第2章)

翌朝ア デ ガが目覚めると、もう巡礼の姿はなかった。いつものように山に出かけようとする、一匹の羊が倒れて死んだ。ア デ ガはそれを宿を拒絶された巡礼の呪いだと言主張する。彼女の中で巡礼は神にまで高められていた。羊にかけられた呪いを解いてもらおうと、おかみはア デ ガを伴って祈祷師の住む水車小屋へと赴く。老人はその呪術ゆえに村の神父から破門の脅しを受けているので、はじめ術をつかうことをためらうが、羊を一匹差し出されると祈祷療法を行なう。さらに、羊たちにかけられた呪いを破るには、満月の夜12時に、道の四つ辻に位置し、しかも檜の木のある泉の水を飲ませなければならないと唱く。その夜までの間、ア デ ガはいつものように山に出かけて過ごしているが、同じく山にきている他の羊飼いたちから、旅籠に戻ってきたばかりのおかみの息子が盗賊の仲間に入っていたこと、さらに旅籠に泊まったきり消えてしまった旅人の話や道端にうち捨てられていた死体の話などを聞かされ、できるものなら旅籠から逃げ出したいと願う。やがて満月の夜になり、ア デ ガとおかみは祈祷師に言われた条件を満たす聖グエンディアン教会に出かけ、羊に水を飲ませてくる。

(第3章)

ある日の夕暮れ、聖クロディオ教会の内庭でア デ ガが羊の番をしていると、例の巡礼が現われその夜の宿を彼女に頼む。ア デ ガは喜んで承諾し、さらに羊の乳を彼に飲ませてあげる。巡礼が去ったあと仔羊が一匹苦しみ出し、ア デ ガはその羊を抱き、暗くなりはじめた道を心細さに戦きながら旅籠に走り帰る。たまたまそこで休息をとっていた若い獵師から、おかみとその息子は呪いをかけた者を見つけ出す方法を教わる。彼によれば、一番病気の重い羊を焚火の中に投げ入れ、その悲鳴を聞いて駆けつける者が犯人だから、その人に小麦を一袋くれてやり、呪いを解いてもらうことだという。言われた通り焚火をおこし羊を投げ込むと、折悪しく、ア デ ガにその夜の宿を頼んだ巡礼がやってくる。旅籠の息子は鎌をつかみ飛び出していく。恐怖のあまりア デ ガは旅籠を逃げ出した。夜じゅう山中を逃げまわり、夜明けにある泉のほとりにたどり着く。そこで彼女は虐殺され倒れている巡礼を発見し、犯人を呪う。その死体を主である神のものと主張するア デ ガは、以前のようにもの乞いの生活をしながら各地を歩き、行き会う人ごとに、自分に子供ができ、それが自分と神との間の子であると触れてまわった。

(第4章)

こうして放浪生活をしていたア デ ガは、ある日の明け方、孫を連れその奉公先を捜しに町へ行く老婆と出会い、一緒に出かける。老婆は奉公人の市のたったその町で、孫だけでなく アデ

ガの主人も見つけてくれるようめくらのエレクトゥスに頼んだ。その結果を待つ間、ア デ ガは旅籠の息子が捕えられ、引きたてられていくのを目撃する。首尾よくふたりの奉公先がそれぞれ見つかり、老婆は送り届けようと彼女らを連れて出かける。まず、孫が手引き小僧として仕えることになっためくらのもとに行き彼を手渡し、そのあと、夜道を歩いてア デ ガの奉公先、ブランドソの館へと赴く。途中、ろうそくを燈し宝捜しをしている不思議な男を目にとめ、神秘好みのア デ ガの心は揺さぶられる。

(第5章)

館にひきとられることになったア デ ガは、翌日、館に麻打ちにやってきた村の女たちと共に働いたが、仕事のあと泉の水面に幼児の顔が現われるのを見、感きわまるあまり失神する。アデガに精神的錯乱の徴候をみてとった召使たちの噂話は奥方の耳に達するところとなり、悪霊祓いに神父が呼ばれる。しかし、お祓いのあともその効めがあらわれそうもなく錯乱状態がひどいので、奥方は女中頭と下僕にア デ ガを聖女バヤ・デ・クリスタミルデの御堂の悪霊祓いのミサへ連れていかせる。3人は同じく御堂へ向かう病人たちと連れだって海辺にあるその御堂に行く。そこでミサを受けたのち、悪霊に憑かれたとみなされている女たちは衣服を剥ぎとられ、白い麻布に裸身をくるみ、砂浜に導かれ、打ち寄せる波を7回受けさせられる。この巡礼からの帰路、女中頭が下僕にうちあげた。「あの娘を海から引きあげた時、あんた何にも気がつかなかったかい？あたしにゃあの娘が身籠っているように思えるんだが……」

以上が『聖なる花』のあらすじである。これからわかるように、この物語の展開上の中心となっているものは、羊の病気と羊飼いの娘ア デ ガに時おり生じる精神錯乱状態のふたつである。これらが迷信に強く囚われたガリシアの民衆の心の中に投じられると、それにより波紋のようにふたつの事件が展開されていき、一方は巡礼の殺害という悲劇を導き出し、他方は悪霊祓いのミサの行なわれる御堂へのア デ ガの巡礼、その海辺での清めの儀式にまで到る。

※

さて、これらの出来事が繰りひろげられる現実に対し、登場人物たちはどのような対応をしているであろうか。以下個々の人物について検討を行なってみよう。

まず、この小説の主人公であり、他の登場人物との間に一線が画せられるア デ ガの場合について考察しよう。先にあらすじの中で、ア デ ガの中で巡礼の存在が神にまで高められると述べたが、それに到るまでの彼女の心の軌跡を追ってみよう。ア デ ガは巡礼を旅籠まで伴ってくるわけだが、「巡礼の粗ラシャのぼろ服は彼女の心の中にキリスト教的感情の炎を燃えあがらせていた」(pág. 353)⁽²⁾。そして、おかみに一夜の宿を拒絶された巡礼に自分の寝起きしている牛小屋を提供するア デ ガは、彼の悪意を全然意に介さず、「自分を愛情深く抱きしめるその聖者のそばにいられることに、身を震わせながら感謝していた」(pág. 357)。そして、巡礼がイエルサレムの聖墓から持ってきたという「指の中にあふれんがばかりの十字架とメダル類に、彼女は聖らかな尊敬の念に囚われ口づけた」(pág. 358)。こうして、巡礼はア デ ガの中でだんだんと聖者化

され、それに続く第1章5節における彼女の見神を扱った箇所では、(実際は彼女と巡礼との牛小屋内での関係を表わすべき節なのであるが、その代わりに)天上界を見ろという奇蹟を行なうことによってアデガが味わう幸福感、絶頂感が表現され、それにより、彼女と聖者化された巡礼との一体化が暗示される。ここで、彼女が見神した際のその歓喜の極みをみてみよう：「時のたつのも忘れ、この夢想の霧の中に迷い込み、彼女は自分の顔に奇蹟の燃えるような息吹がかかるのを感じていた。そして、遂に奇蹟が起こった！ある夏の夕暮れ、アデガは顔色を変え、息をきらして旅籠に帰ってきた。彼女の瞳の青味がかった花の中に妖しい炎が震えていた。憂いをたたえた少女らしい口許は微笑みで半ば開き、顔には神秘的な歓喜が聖油のようにばら撒かれていた。言い表わす適切な言葉がみつからなかった。心臓が胸の中で、びっくりした鳩のように打っていた。雲がひき裂かれ、天国が彼女のまえに現われたのだ。やがては大地が食べてしまうはずの彼女の賤しい眼のまえに！彼女は大地にひれ伏し、唇を震わせ、熱烈な言葉で話していた。彼女の両の頬には涙が流れていた。こんなにも身分の賤しい彼女が、かくもとてつもなく大きな恩寵を受けたのだ！」(pág. 359)。

そして、次の第2章1節では、「巡礼はいなくなっていた。ただ乾草の山に、彼の軀の聖なる凹みが残っているだけだった」(pág. 361)という叙述を経て、死んだ羊についての、「あの巡礼の呪いですよ、おかみさん。あの方は主だったんです。どこに慈悲があるか知ろうと各戸にお布施を請いながら歩き廻っているんです」(pág. 362)というアデガの言葉に到り、彼は神と同一視されることになる。そして、あの牛小屋内での一夜により芽ばえたものは、彼女の意識下でだんだんと成長していき、「みんな今にわかるわ、すばらしい赤ちゃんが私に生まれることが……その子が誰だかわかるでしょう。額に光輪があるから。哀れな羊飼いの娘とわれらが主から生まれるんです！」(pág. 385)という突発的な確信により彼女の中で実体化され、ここにおいて、巡礼の誑かしの結果について処女懐胎という至高の聖化が行なわれる。これもアデガにとり奇蹟的な出来事で、それにより彼女はふたたび至福の絶頂に達することになる。その様子は、彼女が天からその啓示を受けたあのブランデソの館の庭園のシーンの中にみごとに描き出されている：「豪壮な庭園の長い年月を経た木陰に腰を下ろし、あの聖性と芳香に満ちた短い青い夕暮れを見ながら溜息をついていた。彼女は自分の顔に奇蹟の燃えるような息吹があたるのを感じ、そして、その奇蹟が起こった。水を飲もうと天人花の迷路に隠れて流れている泉に身を傾けた時、彼女の童の眼は、落日が震える水面に、にっこり笑っている子供の顔が現われるのを見た。その出現は聖なる前兆であった。アデガは乳房から乳が流れ出るのを感じた。また、われらが主の御子の挨拶のを感じた。それから彼女の眼は見えなくなった。泉のほとりに失神して倒れた彼女は、ただ空を飛ぶ天使の羽ばたきを聞くだけであった。長い時間が経過したあと我にかえり、草の上にすわり、あの無邪気な得も言えぬ出来事を思い起こし、驚き、自らの幸運に涙した。寂寥とした庭園の中を、まるで天の高みに歌いながら消えていく小鳥のように、自分の魂が飛びまわるのを感じた」(pág. 406)。

このように、ア デ ガは自分を騙した巡礼を神格化し、その結果については処女懐胎を考えるわけだが、卑俗な対象の聖化は、巡礼の場合だけでなく他のケースにも現われている。あの老婆の孫を手引き小僧として各地をもの乞いしてまわる盲人について発する、「あのめくらの人は天国の聖者さまで、どこに慈悲があるかを調べ、それをあとでわれらが主にご報告しようと世間をお歩きになっているんです」(pág. 396)という言葉には、巡礼の聖人化の場合と同じ発想がみられる。また、山で羊飼いたちがする幻想的な物語がア デ ガの心の中に入っていくと、「魔法にかかった姫君は小鬼に捕えられた聖女にかわり、隠匿された財宝は山の中をほじくりまわす羊たちに見つけ出され、それでもって金の貝殻で屋根全体を葺いた銀の礼拝堂がつくれると思った」(pág. 388) という表現にみられるがごとく、宗教的な色彩を帯びることになるし、ブランデソの館で働く赤ら顔の少女の名前を聞いて、「ロサルバ! その名の聖女様はどんなにかお美しかったことでしょう。まるで天国のお庭で摘まれたみたいだわ!」(pág. 403)と敬虔にも発する言葉からは、ア デ ガの視線が絶えず天上界に向けられていることが推察できる。また、指摘し忘れたが、彼女は羊の病気に関して神のこらしめというように神的なものを介在させてくる。

このようなア デ ガの精神状態は何を意味しているのだろうか。ア デ ガはあらずじからもわかるように、その両親は飢饉の年に病死し、孤児であり、ひきとられることになった旅籠の主人たちは冷酷この上ないときていて、奴隷のように酷使されている。すなわち、彼女にとって現実とは希望のみられない悲惨な世界であったわけであるが、この悲惨な境遇からのがれようという気持から生じる幸福への願望、これが異常なまでに昂じた結果、彼女の精神が変調をきたすようになったと考えるのが正しいだろう。それにより、彼女は逆境からぬけ出し、主人たちの虐待に耐えるための支えを得るわけだが、彼女の現実へのこの対応の仕方には、邪悪な心を受けつけない白痴的敬虔さがみられるし、さらに一歩進んで卑俗な対象の完全なる浄化という驚くべき聖性が見い出される。そして、見神や処女懐胎の啓示にみられた幻視は、彼女にとっては決して不幸な精神異常の病気などではなく、自らをその非情な境遇から救い出し、至福の世界へと導いてくれるものなのである。

彼女にみられるこの聖性は、彼女の現実に対するかかわり方という意識の構造に現われているだけでなく、彼女の外面性をあらわす表現にもみられる。すなわち、『聖なる花』では、ア デ ガの瞳の表現に、los ojos, donde temblaba una violeta azul (pág.352), sus ojos de violeta (pág. 357), en la azulada flor de sus pupilas (pág. 359), las violetas de sus ojos (págs. 375, 403, 407), la flor triste de sus pupilas (pág. 389), las tristes violetas de sus ojos (pág. 393), las violetas de sus ojos resplandecientes (pág.397), las violetas de sus pupilas (pág.412)などの形で、モデルニスモの象徴的色彩である「青」い蓮の花が比喩として多用されているが、この花はとりもなおさず、この作品の題名にみられる聖なる花を指すもので、それゆえに、「聖なる」 de santidad という形容辞が当然この蓮の花のような青い瞳の持ち主ア デ ガと深い関係を持っていることは、容易に推察できよう。

このように、ア デ ガはその羊の眼を絶えず神聖なもの、及びそれが存在すると考える天の高みに向けているわけである。

次にア デ ガ同様に家畜を連れていっている他の羊飼いたち、及び宝捜しをしている男について考察してみよう。

羊飼いたちは家畜の番をしながら、終日、魔法にかかったモーロ族の王妃の伝説、あるいは山中に隠置された財宝についての物語等をお互いに語り合い、現実の世界からぬけ出し夢想の世界に遊ぶ。時として彼らの心を恐怖で戦かせるような物語をしないでもないが、やはり、自分たちをその非情な現実から救済してくれるような、また、彼らの心を期待で高揚させるような物語に興じる時の方が、その眼は生き生きとし輝いている。宝石類を見せ、その中から一番気に入ったものを選ばせ、その通りにする旅人を術にかけてしまうという例のモーロ族の王妃の物語を聞いて、自分こそは魔術にかからず王妃を救い出し娶ることができると思ひ、「おれたちに現われてくれたらなあ！」(pág. 387)と切望する羊飼いたち、彼らのある者はア デ ガの主張する奇蹟に対して、「あり得ることだよ、奇蹟が起こったってということが！奇蹟が起こったのかもしれない！」(pág. 386)とかなり心を奪われる素地を持っている。また、隠置され小鬼が番をしていると言われている財宝の存在を信じ、捜し求めている男、彼の場合にも、他の人々から狂人とみなされるほど現実から遊離した生活をしている。

ここでみた羊飼いたちと宝捜しの男は、共に幻想的な世界に眼を向けてはいるが、ア デ ガのようにさらに一歩進んで、聖的なもの、天上的なものへの憧れまでは飛躍していない。両者間のこの相違は、先にア デ ガのところであげた、羊飼いたちの幻想的な物語に対する彼女の宗教的なとらえ方の中にはっきりとあらわされている。

※

以上我々は、ア デ ガ、羊飼いたち、宝捜しの男にみられる現実から遊離した幻想好みの傾向、とりわけ、ア デ ガにおける聖化の傾向について言及してきたが、彼ら以外の多くの登場人物たちは、それでは現実に対しどのような対応の仕方を見せているのであろうか。以下、彼らについて具体的に触れる中でこの問題を明らかにしていきたい。

まず、この物語の中心的なふたつの出来事である、羊の病気、及びア デ ガの精神異常に関し展開される事件に対し、彼らがどのような対応をみせているか調べてみよう。羊の病気に関しては、最初、神のこらしめだというア デ ガの言葉が事件のその後の展開の起点になっているが、それが進展していく過程で、ア デ ガの神を介在させる発想は完全に無視されてしまう。すなわち、旅籠のおかみは⁽³⁾という、羊が凶眼の術にかけられたと考え、異端的な術をつかうために村の神父から破門の脅しをうけている祈祷師のもとへ赴くことになる。そして、「わたしにははっきりとわかる、あんたのこの羊たちが凶眼の術にかかっているのが……」(pág. 369)というこの老人の言葉、あるいは、羊に対して「魔女よ出ていけ！魔女よ出ていけ！」(pág. 380)と叫ぶ旅籠のおかみのまじないや、「それは羊に悪霊がとりついたからにちがいない」(pág. 380)

といて呪いをかけた犯人を見つけ出す方法を教える獵師の言葉にみられるごとく、これらの人々の間では、羊の病気の原因を悪魔的なものの仕業に求めることになる。こうして、ア デ ガにより神格化された巡礼は、正反対に悪魔と同一視され、果ては旅籠の息子により虐殺される。次に、ア デ ガの精神異常から発生する出来事について考えてみよう。彼女の行なう見神（幻視）は最初彼らの心を揺さぶるが、ア デ ガが巡礼の神性を唱え、自らの処女懐胎を主張するようになると、それについていけなくなり、「悪い病気に冒されているんだよ」（pág. 384）という水汲みの女たち言葉や、「可哀想に、この娘には時々悪霊が憑りつくんですよ」（pág. 404）という老婆の言葉、さらには、ブランデソの館の女中頭の「悪魔だよ、例の詐術でこの娘に入り込んだんだ。この娘に憑りつき、あたしたちみんなに罪を犯させようと、この娘の口をつかって話しているんだ」（pág. 407）と語る言葉からもわかるように、悪魔という存在を介してア デ ガの精神状態を理解しようと試みる。そして、先にも書いたように、神父による exorcismo や海辺での悪霊祓いの儀式へと展開されていくわけだ。

このように、彼らは羊の病気とア デ ガの精神異常について、悪霊を介在させ理解するという姿勢を見せているが、これは我々現代人にとって非常に迷信的、かつ現実的でない態度ということができよう。しかし、『聖なる花』の世界に生きる人々にしてみれば、迷信は決して現実から遊離した迷妄な信仰などではなく、彼らの日常生活において現われてくる不可解な出来事に解決の糸口を与え、彼らの心の安定をつくり出してくれるものなのである。そして、祈祷師のもとや悪霊祓いのミサに赴くことは、彼らにとっては唯一の実践的、実利的な解決策なのである。

ここで、『聖なる花』の時代背景について触れておこう。この物語の時代背景はかなり漠然としていて捉えがたいが、それでも類推により一応の時代設定は可能である。まず、第1章1節の「その托鉢僧は、全キリスト教徒が天の高みにサンチャゴの道が見えると信じていたあのいにしえの時代の悔い改めの信仰を蘇らせるように思われた」（pág. 351）という表現から、スペインのみならず、外国からの Santiago de Compostela への巡礼がさかんに行なわれていたスペインの中世紀が遠い過去の時代になっていることがわかる。次に、『秋のソナタ』の舞台となったブランデソの館が再び現われてくること、また、そこが同じく舞台となり『秋のソナタ』の登場人物がそのまま出てくる戯曲『ブラドミン侯爵』 El Marqués de Bradomín (1906) の中に、ア デ ガやめくらのエレクトゥスが登場してくることなどから、この物語の時代背景が『秋のソナタ』のそれ、つまり19世紀後半の、しかも第3次カルリスタ戦争（1872-76）が始まる以前であると推定できる。そして、この時代は Valle の幼年時代に相当するものである。

さて、この19世紀後半という時代設定と先ほどみた登場人物たちの原始的かつ前近代的な様相とは矛盾しないのであろうか。これについては次の言葉が答えてくれるであろう。すなわち、「特権的存在であった祈祷師たちが前世紀の後半においてもまだ公式にその活動を要請されていた」⁽⁴⁾とか、超自然の力に対する関心が、「単にガリシアのサンチャゴだけにみられる現象でなく、（フ

ランスのブルターニュ、ノルマンディ両地方と同様に) スペインの北西部全体において、民族的な特徴として、日常におけるごくありふれた因果関係への不信と疑念と共に、未知のもの、超自然的なものへのある種の素朴かつ執拗な軽信性が指摘し得る」という Julio Casares の言葉、⁽⁵⁾あるいは、「因襲に従い、悪霊を海に追いはらうべく、アローサの海岸で波を浴びた憑かれた女たちの通り過ぎるさまは、Valle の子供たちのイマジネーションを戦慄で満たした」という R. Gómez de la Serna の言葉から判断するならば、⁽⁶⁾『聖なる花』は想像や夢想でなく、観察し、知覚し、実際に眼で確かめ体験したガリシアの生活風景を描き出したものと言える。Valle の迷信と神秘に対する関心は、生まれた土地のこのような風土の中、しかも、『ほの暗き庭』の序文に書いているがごとく、ミカエラという彼の祖母つきの老女中が語る聖者や浮かばれない霊や魔女や盗賊の物語を聞きながら過ごした幼年期の体験を通してはぐくまれてきたものであった。以上のことを総合すれば、『聖なる花』における迷信に囚われた原始的な民衆の姿が、決して架空のものでなく、現実に応じたものであることがわかる。

さて、論を元に戻して、彼らの現実への対応をより具体的に検討していこうと思う。この物語の登場人物は多彩であり、物語中で占めるそれぞれの重要度も区区であるから、すべてについて言及することは困難だし、また、無意味であると考える。それゆえ、便宜上、1) 各地を放浪している人々、2) 旅籠のおかみと息子、3) その他という3つのグループに分けて考察していきたい。

1) 各地を放浪している人々

彼らの中には例の巡礼、エレクトゥスをはじめとするめくらたち、それに聖女バヤ・デ・クリスタミルデの御堂に向かう乞食、不具者、病人たちの群があげられるが、いずれもお布施を請いながら生活している人たちである。巡礼はア・デ・ガにより聖人化されるが、実際は、水汲みの女たちが言うように、その地方を歩き廻っていた名の知られた prosero である。そして、旅籠のおかみに一夜の宿を拒絶されると、「巡礼はぶつぶつ言いながらそこを離れた。そして錫杖の先で石を打ちすえていたが、急に振り返り、土を一掴みとって旅籠に投げつけた。小道のまん中に仁王立ちになり、激しく陰にこもった呪いの声で叫んだ。――神よ、疫病でこの薄情な家を永久に閉ざしてしまわんことを！ いく抱えもの刺草がこの戸口に生えますように！ 蜥蜴が日なたぼっこをしに窓辺を歩き廻りますように！ ……」(pág. 356)と呪いの言葉を吐く、ごくありふれた俗物である。彼は親切にも宿を提供してくれたア・デ・ガの無邪気な信仰心に乗じて彼女を誑かす、かなりやくざな男なのである。また、この物語には3人の盲人が登場する。ひとり、田舎娘たちの車座のまん中で気晴らしになるような話を語って聞かせ、みんなを喜ばせている狡猾そうな乞食坊主である。彼は酒と女と歌の好きだったむかしの陽気な主席司祭を髣髴させる人物で、現実の悲惨さにうちひしがれている様子はみられない。エレクトゥスも彼と同類で、その世渡りのうまさは抜群であり、それは奉公人の市での人々の彼に対する歓迎ぶりや、その振り分けが今にもこぼれ落ちそうなほどお布施でいっぱいになる様子をみれば明らかである。また、老婆

の孫を *lazarillo* として乞食をして廻るもうひとりのめくらの場合は、前二者とは違い世渡りはさほど上手そうではなく、先の巡礼同様、現実に対してにがにがしい感情を抱きつつ世間を放浪している。いずれにせよ、彼らはすべてその眼を現実据えて、夢想の世界に遊んだりもしない。その現実へのかかわり方は悪者（ピカロ）風であり、程度の差こそあれ、非情な現実から逃げ出したりせずにうごめきまわっている。このような態度は、放浪の身にある人々の中でもいちばん悲惨なたぐいの人たちの場合でもしかりで、それは、聖女バヤ・デ・クリスタミルデの御堂の儀式に赴く人々の描写の中にはっきりとあらわされている：「前方を乞食たちの一団が歩いていく。彼らの嘲弄的で不信心な声が聞こえてきた。ひも状に並んだ毛虫のように、道に沿って体を引きずっていく。ある者はめくら、ある者はいざり、またある者は癲病みである。彼らはおしなべてひとさまのパンを食い、報復的におのれの不幸を振りはらったり、強欲な金持ちの戸口でその膿をひっかき飛ばしたりして世間を放浪している」(págs. 409—410)

ここにあげた人々は、ア・デ・ガのように天上界への憧れから幻視したり、羊飼いたちや宝捜しの男のように夢物語の実現を願って現実から遊離したりしない。彼らはすべて現世のご利益を求め、現実の悲惨さを直視し、ある者は底抜けに陽気で世渡りのうまさをみせるし、またある者は自らの不幸を嘆きつつも現実にたちむかっていく。

2) 旅籠のおかみとその息子

このふたりを特徴づけているものは、彼らにみられるきわめて現世的な悪徳である。すなわち、彼らはア・デ・ガを奴隷のように酷使し、専横で残酷な人々たちである。羊飼いたちがする、その旅籠に泊ったきり消えてしまった旅人の話や、道端に打ち捨てられ朝を迎えた死人の話からも推察できるように、彼らには何か残忍で血なまぐさい犯罪的なイメージがつきまとい離れない。この悪徳は息子において特に顕著であり、羊の生皮を剥ぎ腕を血だらけにした様子、さらに、生きたまま羊を炎の中に投げ入れる冷酷さや巡礼を鎌で虐殺する凶暴性をみればそれは明白である。彼らをこのような犯罪的行為に走らせるのは、ひとえに来世をかえりみない現世至上主義的な発想であり、現世における物欲の昂じた結果である。ここで彼らにおける貪欲な性状についてみてみよう。おかみはア・デ・ガを無給で朝早くから酷使するし、また、慈悲を請う巡礼に対しては、すげなくこれを拒絶する。さらに、祈祷師に暗に羊の提供を催促された時の、羊の病氣は治してもらいたいがその報酬はあげたくないというおかみの醜悪なことこの上ないジレンマをみてみよう：「主人に近づいていった時、(ア・デ・ガは)貪欲さがうち震えているその銅色の眼の中に、老人に仔羊を差し上げなさいという苦悶の叫びのごとき命令を見てとった」(pág. 369)。このように、旅籠のおかみの性格を特徴づけているものはこの貪欲さであるし、これはその息子においても同様である。すなわち、彼が盗賊の仲間に入り各地を荒しまわっていたという過去の事実も現世的物欲のなせる業であるし、また、羊に呪いをかけた犯人を捜すための迷信的な方法の遂行の過程で、猟師が奨めたように現われた人物に小麦を一袋あげるかわりに逆に殺害するという顛末も、彼のこの性向をよく表わしている。

3)、その他

以上に挙げた人たちのほかに、この物語ではまだ続々とガリシアの民衆が登場してくるが、そのうちの祈祷師、獵師、水汲みの女たち、老婆、女中頭については、ごく簡単ながら羊の病気及びアデーガの精神異常における対応の仕方のところで述べたから、ここでは触れないことにする。ただ、彼らのすべてが例のふたつの事件のいずれかに対し、迷信的なかわり方を示したことで、すなわち、彼らにしてみれば、先にも述べたように、非常に現世的な対応をみせたことをここでもう一度喚起しておきたい。

さて、ここでは今までに挙げなかった人たちについて言及しようと思う。まず、旅籠にやってきた羊毛商人や釜商人たちのシーンをみてみたい。：「アデーガは台所の火の近くにしゃがみ込み、彼らが誰の仲裁もみられない中で、言い争いや脅し合いをしているのを聞いたものだ。そのあと彼女の眼は、それらの男たちの間に折合いがつき、おとなしくなっとうす暗い部屋の片隅に集まる様子を驚きをもって目撃し、それから、密かに配分されるお金の音を聞いたものだ」(pág. 371)

ここには、現世的物欲にとらわれた商人たちの醜惡な姿が簡潔なタッチで描かれているが、また、そこには Valle の現世欲に対する軽侮の態度が読みとれる。作者はその伝說的赤貧さにもかかわらず寛大な精神の持ち主で、貪欲な者たちを描く際は激しい皮肉をこめてこれを行なうのが常である。それは『野蠻劇』の中で老郷士の息子たちを描くときや、後期の戯曲作品でブルジョワ階級を描くときの強烈な輕蔑の態度にみられるように、後になると一段と激しく表現されるようになる。

次に、奉公人の市に集まってきた人々。その中のめくらのエレクトゥスと職を捜している3人の若者たちの間で交わされる対話にみられるように、彼らはその境遇にもかかわらず何と快活で底抜けに明るいことか。また、下僕を捜している人とその志願者たちのやりとり、あるいは両者の間に介入していき保証人のような役を演じようとしている近所の老婆たちにみられる抜け目ない様子、これらにしても、生き生きとした現世臭を一面に発散しているシーンをつくり出している。さらに、例のめくらのまわりに集まってその話に興じている女たちの陽気な様子、あるいはブランデソの館の召使たちののびやかさ、これらのシーンにも現実の生活に密着した人々の姿が感じとれる。

以上我々は、『聖なる花』の登場人物たちの現実に対するかわり方について考察する中で、彼らのある者たちにみられる幻想的な、とりわけ天上志向的な傾向と、他の者たちにみられる現世的なそれとのコントラストを浮彫りにしてきた。この天上的一現世的というふたつの要素の対比は、登場人物の現実認識という、いわば内的世界を特徴づけているだけでなく、この作品の外的世界、すなわちこの物語の舞台を取り巻く ambiente の中にも強く現われてきている。そうして、この物語の対比的な世界の様相を二重に強調しているように思われる。以下、この外的世界の表現にみられるコントラストについて言及したい。

※

『聖なる花』は、ほぼ全編にわたり屋外、つまり、ガリシアの自然がその主要な舞台となっているから、当然、風景描写もしくはその自然の中にごめく人々の情景描写が作品世界の雰囲気を決定するのに支配的な力を発揮している。それゆえ、この作品の外的世界を浮彫りにするには、これらの描写の面から見ていくのが最良の方策と考えられる。

この物語を読むと、牧歌的かつのどかな風景に出会い、我々読者は何かしらほっとするような安堵感につつまれる一方、荒涼とし陰鬱な風景、及び我々の心を恐怖の黒い翼で蔽うような悲惨で痛ましいばかりの情景に出くわして戦慄をおぼえる。風景描写におけるこの二面性は何に起因しているものなのであろうか。具体的にそれらの描写を紹介する中で、その原因を明らかにしてみたい。

まず、牧歌的な風景描写をあげよう。

「朝日が聖なる長い一日のためであるかのように、彼女の頭上に昇った。山々の雪の頂では、暁の薔薇色の薄靄が天使の輝きのごとく震えていた。平野は夜明けの金色と紫色の下で目を醒ました。夜明けは平野をマントで蔽っていた。大男の聖クリストバルの厳かな肩から離れたマントで……緑の畑の香りが人里離れた幸せな田園生活を賛美するがごとくに、あたりにばら撒かれていた。牧場の奥の方では、淀みになって溜っている水が、花々を銀色に彩っていた」(pág. 362)。

「朝の光が畑を金色に輝かせ、露をしたたらす緑の垣で馨しい道は、家畜の鈴の音の下で目を醒ました。彼女らは羊たちを追いたてていった。道は種まき時やぶどうの収穫期の老道のようにじめじめし、曲がりくねった田舎道であった。羊たちの蹄の下では野草が折れ曲がり、群が通過するとゆっくりとふたたび頭をおこし、あたりに新鮮な露が放つ、朝の清らかな香りをばら撒いていた……」(págs. 363－364)。

「ある日の午後、アデガは聖クロディオ教会の糸杉の老木の陰になった内庭に腰を下ろし、打ち砕いたばかりの麻の玉を次から次へと紡いでいた。彼女のまわりでは、羊たちが草を食んだり土を掘ったりしていた。また、マスティン犬は寝そべって、山々の頂を金色に染めはじめた落日の生暖い愛撫を受け、まどろんでいた」(págs. 374－375)。

「その頭上では小鳥たちが歌って夜明けを告げていた。早起きの山羊飼いがふたり、丘のふもとで群を導いていた。はるか遠くの村々では、白い煙がかすかにたち昇っていた。そして、さらにもっと遠くでは、殉教者聖クロディオの御堂の糸杉が、琥珀色の光を浴びたその樹頭をもたげていた」(pág. 384)。

「ゆっくりと太陽が山々の頂を金色に染め始めた。草の上では露が光り、木々のまわりでは巣立ったばかりの小鳥たちが臆病そうな羽ばたきで飛びまわり、小川が笑い声をたて、木立ちがさんざめき、そして緑に縁取りされたそのもの悲しく人気のない道は、種まき時やぶどうの収穫期の老道のように目覚めていた」(pág. 390)。

「山々の上で輝いているあのおだやかな太陽の下で、あちこちの村の人々が道を横切っていた。

青い霧の広がる遠い彼方には、樹頭にたそがれの金色の照り返しを浴びた聖クロディオ教会の黒々とした、もの思いに耽る糸杉が見えた。家畜の群は村を指して戻っていった。家々からたち昇るほのかな白い煙が、平和の挨拶のごとき光の中に消散していた」(pág. 395)。

「陽の光が差し始め、風が雑木林や栗林のあたりに古い鐘楼の鐘の音を運んだ。それは敬虔で幸福な田園生活の挨拶のごとくで、露や野良の香りを浴びているみたいだった」(pág. 412)。

ここに列挙した風景描写が我々に与える印象は牧歌的、恩寵的かつ幸福なものであるが、それは何に起因しているのであろうか。これらの描写を読んで即座に気付くことは、いずれにおいても太陽の金色の光が介在し、舞台を明るく彩っている事実である。天の高みから降り注いでくる陽の光、これが暖かく至福な雰囲気をかもし出す源となっていることは疑いのない事実であろう。また、ここには挙げられなかったが、この他の牧歌的な風景描写の場合もおおむね太陽の光によりかもし出されている。ところで、この金色の光は一体何を意味しているのだろうか。それはとりもなおさず神の恩寵の光であり、天上的なもの、神的な恵みのあらわれである。このことは、「昼間は太陽の光を浴びて天国の栄光を歌うあれらの老鐘よ！」(pág. 413)というこの物語の最後にみられる表現に端的にあらわれている。また、例のアデガの見神に関する描写の中で、天国の栄光が雲のひき裂かれた天の上空の神々しいばかりの光の中にあらわれ、彼女を神秘的な歓喜につつま込む様子もこの事実を明確に立証しているものと考えられる。

これに対し、『聖なる花』には先にも触れたように、これとは正反対の悲惨で非情な風景描写、もしくはその中に現われる人々の情景描写もみられる。以下これらの描写について考えてみたいが、まず、作品中のそれらの描写をいくつか具体的に紹介しよう。

「旅籠は街道沿いにではなく、痛めつけられ枯死した数本の松がたっているだけの荒野のまん中に位置していた。あらゆる時節を通じて荒涼とし静寂なその山岳地帯は、冬の午後の暗雲に蔽われた空の下で、一層その感を強くしていた。隣り村の犬が吠えていた。また、この世の危険を象徴するこだまのように、遠い海辺の巨大な波の砕けるにぶい音が聞こえていた。旅籠は新しかった。陰しい黄褐色の連山の間にあって、血の色をしたあの門の大扉と、果てしない冬の雨ですでに消え消えになっている建物正面の青と黄の絵様は、嫌悪と恐怖とからくる何とも形容しがたい感じをつくり出していた」(pág. 351)

「何という冬であったことか、あれは！教会の内庭は新しい墓で蔽われた。たけり狂った狼が毎夜村に下りてきて、絶望的な叫びをあげるのが聞こえてきた。夜が明けても、早起きの歌声が裏庭の静穏をかき乱すことも、また、太陽が寒さにかじかむ畑を暖めることもなかった。毎日霧雨の灰色の経帷子にくるまれ単調に過ぎていった。風は激しく冷たく愛撫はもたらさず、芳香も運ばず、野草をしなびさせる呪いの息吹であった。日が暮れると、時おり、松林に隠れた魔女があゝ世の声で嘆くのが聞こえてきた。牧舎は空になり、かまどの火は消えた。煙突の中ではいたずら神が退屈のあまり死んでいった。屋根瓦の隙間からは、意地の悪いかたくな雨が湿気のたちこめる小屋に浸み込んでいた」(págs. 354-355)。

「何という冬であったことか、あれは！山中に隠れた部落より、狼のように下りてきた村人たちの行列が、来る日も来る日も街道に列をなしていた。日暮れに村を横切る時、彼らの木靴はすべてを壊滅させるような音をたてた。彼らは道に迷った家畜の群のように、静かに立ち止まることなく通っていった。彼らはその村もまた飢えていることを知っていたのだ。街道をゆっくりとした足どりで、疲れきりばらばらの列をなして進んだ。(中略) それから遠くの町々、いまだに城壁の門を保持している封建的な古い町々に向けて巡礼を続けていった。先頭の人たちは朝が雪で白く見える頃に現われ、しんがりは夕暮れが吹雪の襲に身をくるみ逃げ去っていく頃に着いた。次から次へと到着すること、彼らは旧家の表門の前にすわり込んで待っていた」(pág. 355)。

「雲に蔽われた、月のない空の下でかもめが鳴いていた。夜の12時になりミサが始まった。(中略) ミサが終わると悪霊に憑かれた女たちはみんな衣服を剥ぎとられ、白い麻布に身をくるみ、海に導かれた。ア デ ガは恥じ入って泣いたが、女中頭の手配したことすべてに慎ましく敬意を払った。悪霊に憑かれた女たちは波に向かい合うと悲鳴をあげ、砂中に足をうずめながら抵抗した。彼女らを蔽っていた麻布が落ち、蒼白い裸身が伝説中の熱烈でしかも悲しい大罪のごとくに現われ出た。泡に縁取りされた黒い波が彼らを飲み込もうと身を起こし、浜辺をのぼってきて、あの乱れ髪や頭の寒さにうち震える肩に落ちかかった。血の気の失せた罪深い肉体は震え、冒瀆的な口は海の塩からい水をはき出していた。波は引いてゆき岩肌を乾かし、はるか沖合いでは、陰にこもった吠え声をたてる波が、ふたたび頭をもたげはじめる。その打ち寄せる波は、聖者に対するサタンの誘惑のごとくであった」(págs. 410 - 411)。

ここにみられる風景描写、もしくは情景描写には、先ほどの牧歌的な描写にみられたような太陽の光は、いずれの場合にも現われてこない。暗雲に蔽われた空の下、霧雨のしとしと降りしきる天候のもと、あるいは月さえその光を放たない暗夜の中で、それぞれ荒涼とし恐怖心をおこさせるような風景や、飢饉の年の悲惨な情景、それに神にみはなされた病人や狂人たちの非情なシーンが導き出され、展開されているわけだ。すなわち、ここでは光の不在が神の恩寵の不在を暗示し、『聖なる花』の現実世界の悲惨で黙示録的なすさまじいばかりのもうひとつの様相を表現する手段となっているように思われるのである。

※

以上みてきたように、『聖なる花』の構成上の大きな特徴として、天上的なるものと現世的なるもののコントラストがあげられる。次に、この対照性がどのような意味をもっているか考えてみよう。この作品を読んで感じることは、この対照的な要素がほとんど対立の関係になく、Melchor Fernández Almagro が『聖なる花』について「宗教伝説の素朴な詩情(天上的)と赤裸々なリアリズム(現世的)とが融合している」⁽⁸⁾(括弧内は筆者)といみじくも言っているように、両者がひとつの世界の中に共存している事実である。両者は拮抗の状態ではなく渾然と融合しているのである。Valle はこの作品においてどちらか一方が優位を占めるような結末を与えていない。アデガはアデガなりに、その他多くの民衆は民衆なりに相も変わらぬ生活を続けていくのだら

うことがそこから推測される。どちらかが優位を占めた場合、両者の均衡は破れ、この作品世界は変化していくことになるわけだが、それが感じられない。先に時代背景が19世紀後半の Valle の幼年期に相当すると述べたが、これは主に他の作品との関係から類推したもので、この作品だけを読んで時代背景を把握することは、それが漠然としているが故に非常に困難なことである。そして、このことはこの作品世界の不変な構造と無関係ではない。つまり、いつの時代と捉えてもかまわないのであり、遠い昔から変わらずに続いている世界とみなし得るのである。この作品の副題として《 *historia milenaria* 》（千年来の物語）と付加されているのも、こうした事情をよく説明していると思われる。このように、時間を超越したものは Valle の美学に合致するもので、それは彼が自分の美学観を表わした書、『不思議なランプ』 *la Lámpara Maravillosa* (1916) の中で「世界に対する我々の直観が時間の空しい要請をとりはらう時、永劫の美の奇蹟⁽⁹⁾がつくり出される」と書いている通りである。また、天上的なものと現世的なものの融合による非対立性、もしくは闘いの欠如は、この作品を非常に静的なものたらしめている。そして、これも、「ただ事物の至高の不動性を探求することだけで、その永劫性の美しい謎を事物の中に読みとることができる⁽¹⁰⁾」という彼の *quietismo*⁽¹¹⁾ 風の思想に呼応している。

最後に断わっておきたいが、論を進めるにあたり筆者はテキストからのかなりの引用を行なったが、それは作品中にみられるあの対照性を訳文でもって具体的に明示したかったことのほかに、まだわが国では皆無といってよいほど紹介されていない Valle-Inclán 文学に対する関心を強く喚起したいという筆者の切なる願いによるものである。

1976 . 7 . 12

注

- (1) Ramón Sender: *Valle-Inclán y la dificultad de la tragedia*, Madrid, Gredos, 1965, pág. 97
- (2) 本稿における『聖なる花』からの引用は、すべて Don Ramón del Valle-Inclán: *Obras escogidas, Tomo I*, Madrid, Aguilar, 1974 内の *Flor de Santidad*, págs 351 ~ 413 による。
- (3) あるやり方で相手を見つめることにより、その人に禍を及ぼすことができると俗に考えられている呪術。
- (4) Julio Casares: *Crítica Profana*, Madrid, Espasa-Calpe, 1964, pág. 84
- (5) *Ibid.* pág. 85
- (6) R. Gómez de la Serna: *Don Ramón María del Valle-Inclán*, Madrid, Espasa-Calpe, 1969, pág. 129
- (7) Melchor Fernández Almagro は、工事現場の足場を踏みはずして墜落し片腕を失った哀れな労働者に対し、Valle が彼の再生のための費用として、国許から受け取ったばかりの自らの生活費すべてを提供したというエピソードを紹介している。
(M. F. A. : *Vida y Literatura de Valle-Inclán*, Madrid, Taurus Ediciones, 1966, págs. 41-42)
- (8) *Ibid.* pág. 91
- (9) Don Ramón del Valle-Inclán: *Obras escogidas, Tomo I*, Madrid, Aguilar, 1974, pág. 569
- (10) *Ibid.* pág. 567
- (11) スペインの神学者、Miguel de Molinos (1628-92) の唱えはじめた異端の教理で、神秘主義者たちにとって重要であった宗教活動を軽蔑し、*contemplación pura* (純粹観照) を説いている。